

# 『草堂詩餘』と書會

藤原祐子

## 一、はじめに

『草堂詩餘』は、南宋末の編纂に係るとされる唐宋詞の選集本であるが、文學史のみならず、「詞」の受容と流通という文化史の観点から見ても、極めて重要な意味を持つ書籍である。この詞選集は元明朝期に頻繁に増補改訂され、次々に新たな版が刊行された。それぞれの刊本間の異同も甚だしい。その状況は、詩選集でいえば『千家詩』と類似しており、原形はおろか版本の系統すらにわかには定めがたい。唐宋詞の元々の姿を考える上では必ずしも「使い勝手」のよい書籍とは言えないだろう。だが、『草堂詩餘』のこの使い勝手の悪さは、實は『草堂詩餘』のかつての「使われ方」を物語っているのではないか。『草堂詩餘』は、かつては最も使い勝手のよい詞選集だった。そうであったからこそ、増補改訂が繰り返され、新しい刊本が次々と世に送り出されることになったのだと考えられる。その流布と浸透を證明するかの如く、明清期の詞話には『草堂詩餘』に言及するものが少なくない。同じ南宋期に編纂された詞選集には他に『樂府雅詞』、『花庵詞選』等もあるが、版本の量、言及される頻度、そのいずれにおいても、『草堂詩餘』には遠く及ばない。<sup>①</sup>

『草堂詩餘』と書會

本論に入る前にまず『草堂詩餘』の概略を述べておこう。『草堂詩餘』の主な刊本については、中田勇次郎氏にすでに詳細な考證がある。

『草堂詩餘』の最も早い刊本は南宋寧宗期には存在していたと考えられるが、残念ながら現存しない。<sup>②</sup>『草堂詩餘』の諸刊本には、大きく分けて、四季雜題に配列された「分類本」と呼ばれるものと、詞の長短及び詞牌別に配列された「分調本」と呼ばれるもの二系統がある。分類本の體例は、六朝唐代以來の類書類（天・歲時に始まり花木鳥獸に終わる）や歲時記類（上元・寒食といった節序による分類）に範を得ていると考えられ、さらに註と詞話を伴う點が特徴である。分調本は詞を字數の多少によって「小令」「中調」「長調」の三種に分かつて編纂し、註や詞話を附さないものも多い。

分類本と分調本それぞれの成立の先後については、王國維・趙萬里兩氏に既に考察があり、その見解は以下の三點にまとめることができる。<sup>③</sup>

- ①分調本が附する小題は分類本の子目と一致する。
- ②分類本は撰者不明の場合はその名を書き入れる場所を空けてあるが、分調本は分類本がその前の詞に記す撰者をそのまま當てて撰者としている。

③分調の方式には他に範とすべき文獻がない。結論としては、分類本を詞牌ごとに配列し直したものが分調本であり、つまり版本としての起源は分類本のほうが古いということになる。この見解については中田氏も贊同の意を示されており、恐らくそれが正しい。そこで、分類本系統の刊本を見てみると、現存では元・明初のものが早い。今日我々が目にすることの出来る最も古い刊本からすでに「分類」によって詞を配列し、註や詞話が附されている。それら古い刊本間には、それぞれに細かな異同はあるものの、體例・收録作品・註・詞話などはよく似ているように思われる。本稿は、これら『草堂詩餘』の比較的古い刊本が、「讀む書物」であるよりも「引かれる書物」、すなわち「類書」として受容されていたことを指摘し、その受容の諸相について考察するものである。

なお、『草堂詩餘』は明代には「分調」という新たな體例が生み出されたが、その書物としての性格は恐らく一貫して變わってはいまい。要は、やはり「引かれる」書物だったのである。詞を詞牌によって並び替えるという發想は、詞の歌曲としての性格から見て極めて自然なものであり、その結果生み出されるのは一種の「詞律」本といえよう。「詞律」本は、「分類」とは別の觀點からではあるがやはり檢索を旨指している。つまり、『草堂詩餘』という名で呼ばれる一連の書物は、「分類」「分調」の別を問わず、その編纂當初からすでに「引かれる」ことが想定されていたと考えられるのである。

## 二、『草堂詩餘』と『水滸傳』

一般に、話本や章回小説では、巻頭と巻尾には必ず詩詞が置かれるだけでなく、物語展開の様々な局面で韻文を利用する。それらの詩詞

は、たとえば美女が登場すればその美しさを詠い、雨が降れば雨を詠い、主人公が旅に出れば途上の風景を詠い、馬上の一騎打ちが展開されればその様を詠うといった具合で、物語にあらわれる事象を詠物的な觀點から取り上げたものが多い。そして、散文での敘述の中にそういった韻文が挿入されることによって、敘述のリズムに変化がつくのみならず、物語の展開に興行きやふくらみが付與されることになる。まず、百回本『水滸傳』第七十二回の次の場面を見てみよう。

李師師低唱蘇東坡「大江（西水）（東去）」詞。宋江乘着酒興、索紙筆來、磨得墨濃、蘸得筆飽、拂開花箋、對李師師道「不才亂道一詞、盡訴胸中鬱結、呈上花魁尊聽」。當時宋江落筆、遂成樂府詞一首。道是、

天南地北。問乾坤何處可容狂客。借得山東煙水寨、來買鳳城春色。翠袖圍香、絳綃籠雪、一笑千金值。神仙體態、薄倖如何消得。想蘆葉灘頭、蓼花汀畔、皓月空凝碧。六六雁行連八九、只等金雞消息。義膽包天、忠肝蓋地、四海無人識。離愁萬種、醉鄉一夜頭白。

寫畢、遞與李師師、反復看了、不曉其意。宋江只要等他問其備細、却把心腹衷曲之事告訴。

宋江は李師師と酒を飲み、興に乗って自らの心境を託した詞を一首作る。ここに見えるような場面で詠まれる詞は、その内容が『水滸傳』の物語展開と深く絡んでいなければならない。そのため、作者はみずから創作してこれを挿入するしかない。

しかし、たとえば同じ『水滸傳』第七十二回には次のような場面もある。上元節の前夜、汴京城内で飲んだ宋江たちが宿屋に戻ると、留守番をしていた李逵に何故自分は城内に連れて行ってもらえないのかと文句を言われる。翌日、宋江は李逵と共に街に繰り出す。

李逵困眼睜開、對宋江道「哥哥不帶我也罷了、既帶我來、卻教我看房、悶出鳥來、你們都自己去快活」。宋江道「爲你生性不善、面貌醜惡、不爭帶你入城、只恐因而惹禍」。李逵便道「則不帶我去便了、何消得許多推故。幾曾見我那裏嚇殺了別人家小的大的」。宋江道「只有明日十五日這一夜帶你入去、看罷了正燈、連夜便回」。李逵呵呵大笑。過了一夜、次日正是上元節候、天色清明得好。看看傍晚、慶賀元宵的人不知其數。古人有一篇【絳都春】詞、單道元宵景致。

融和初報。乍瑞靄霽色、皇都春早。翠幃競飛、玉勒爭馳都（聞）  
〔門〕道。鰲山彩結蓬萊島。向晚色雙龍啣照。絳霄樓上、彤芝蓋底、  
仰瞻天表。○縹緲。風傳帝樂、慶玉殿、共賞群仙同到。迤邐御香、  
飄滿人間開嘻笑。一點星毬小。漸隱隱鳴稍聲杳。遊人月下歸來、洞  
天未曉。

這一篇詞、稱頌着道君皇帝慶賀元宵、與民同樂。此時國富民安、  
士農樂業。當夜宋江與同柴進依前扮作閑涼官、引了戴宗・李逵・  
燕青五箇人、逕從萬壽門來。是夜雖無夜禁、各門頭目軍士、全付  
披掛、都是戎裝慣帶、弓弩上弦、刀劍出鞘、擺布得甚是嚴整。高  
太尉自引鐵騎馬軍五千、在城上尋禁。宋江等五箇、向人叢裏挨挨  
搶槍、直到城裏、先喚燕青附耳低言「與我如此如此、只在夜來茶  
坊裏相等」。

元宵前夜から十五日の當日に至る一連の場面の中に、【絳都春】とい  
う詞が挿入されている。『水滸傳』は、この作品を引くにあたって  
「古人有一篇」と述べるのみであるが、たとえば『全宋詞』が丁仙現  
の作とするように、この【絳都春】は今日は一般に「教坊使丁仙現」  
の作品として知られている。この丁仙現という人物は、『東京夢華錄』

卷二や『夢梁錄』卷二十などにその名がみえる。それらの記述による  
と、熙寧年間に教坊大使の地位にあった俳優で、音楽と演劇にかけて  
の大立て者であったという<sup>10</sup>。ただし、それらの記述に彼の作になる詞  
が引用されることはない。もちろん別集はなく、『樂府雅詞』や『花  
庵詞選』といった詞選集にも彼についての言及は一切無い。では『全  
宋詞』等がこの【絳都春】をなぜ丁仙現の作とするかといえ、恐ら  
く『草堂詩餘』が丁仙現の名のもとにこの詞を収録するからである。  
實際、『全宋詞』はこの作品を『草堂詩餘』から収録したと、註記し  
ている。つまり、明末までに成立した現存する資料群の中では、唯一  
『草堂詩餘』（乃至その改編本）だけがこの詞を伝えるのである。この  
作品が事實丁仙現の作であるかは明らかではないが、これを掲載する  
のが『草堂詩餘』のみであることからすれば、『水滸傳』はその成立  
過程のいずれかの段階に於いて、『草堂詩餘』を参照して引用した可  
能性が高いのではあるまいか<sup>11</sup>。

しかも、先に挙げた場面の詞が宋江の志を詠い上げ、今後の物語と  
も深く関わってくるものであったのとは異なり、この元宵の敘述にお  
いては、詞は單に元宵の風景を詠物的に詠うだけである。その意味で、  
『水滸傳』という固有の物語が展開していく上では必ずしも必要なも  
のではない。言い換えれば、これは他の物語の同様の場面に置かれて  
も違和感なく収まってしまふ種類のものである。のちに三言二拍の例  
でも示すように、こうした物語の展開を大きく左右しない場面に詞を  
引用する際には、作者たちは既製の作品を何處かから探し出してきて  
利用することがよく行われた。とすれば、二つ目に挙げた場面に於い  
て丁仙現の詞が引用されているという事實は、『草堂詩餘』がそうし  
た際の重要な参考書だったことを示唆していると考えられる<sup>12</sup>。

## 二、『草堂詩餘』と成化本『白兔記』

『水滸傳』の成立過程は非常に複雑であるために、『草堂詩餘』がいつ頃、どの段階で参照されたのかについてはわからない。だが、『水滸傳』が形作られていた宋元の頃、小説や戯曲の創作者集團として「書會」と呼ばれる組織があったことは注目に値する。「書會」という名稱そのものは、南宋の耐得翁『都城紀勝』『三教外地』や周密『武林舊事』卷六「諸色伎藝人」などにすでに見え、特に『武林舊事』では「書會」という項目を「演史」「小説」などと同列に掲げて、そこに六人の名前を擧げている。また、『水滸傳』の中にも實は「書會」の語が見え、例えば第九十四回には次のようにいう。

先人書會留傳、一箇箇都要說到（書會の先人たちから傳わったことは、残らずお話しせねばなりません）。

『水滸傳』が最終的に誰の手によってまとめ上げられたのかはともかく、「書會」とよばれるものによって語り傳えられてきた「物語」があった事は明らかだといえよう。また、たとえば初期南戲作品である『永樂大典戲文三種』『張協狀元』は「九山書會」、同「小孫屠」「錯立身」は「古杭書會」、一九六七年に発見された成化本『白兔記』は「永嘉書會才人」の手になると、それぞれテキスト中に明記されている。これらの事實からするならば、その實體や内實は不明であるものの、小説や戯曲の創作に攜わる「書會」という組織があったことは確實である。

以下、本稿ではこの「書會」との関連に注目しながら、『草堂詩餘』について考察してみたい。まず、成化本『白兔記』を例に取り上げてみよう。

成化本『白兔記』（正名は『劉知遠衣錦還鄉白兔記』、以下『白兔記』と略稱）は、一九六七年に上海市郊外嘉定縣の明代墳墓から発見された、明・成化年間の刊行にかかる十二冊の刊本のうちの二冊であり、今日知られる最古の南戲の刊本の一つでもある。成化本を含めた南戲『白兔記』は、五代唐の劉知遠とその妻李三娘の悲歡離合を描いたもので、すでに失われた元曲「李三娘麻地捧印」の改編と考えられている。

その冒頭第一出「副末開場」には、座長と舞臺裏の役者達とのやりとりがあり、『白兔記』の「出自」が明らかにされる。

**末白** 今日戾家子弟搬演一本傳奇。……既然搬下、搬的那本傳奇、

何家故事。**内應** 搬的是李三娘麻地捧印、劉知遠衣錦還鄉白兔記。

**末白** 好本傳奇。這本傳奇虧了誰。**内應** 虧了永嘉書會才人。

**末のセリフ** さて今日は、素人藝人達が一本の傳奇を上演いたします。……おさらいが出来ているのならば、これから上演するの

は何のお芝居で、どこのお話か。**内で應じる** 『李三娘、麻地にて金牌を受け、劉知遠は故郷に錦を飾る白兔記』を演じます。

**末のセリフ** 素晴らしい物語だ。この脚本は誰の手になるのか。**内で應じる** 永嘉の書會の才人たちです。

このように、『白兔記』は「永嘉書會才人」の手になるものであった。ちなみに「永嘉」は、たとえば『永樂大典戲文三種』の「張協狀元」を編んだとされる「九山書會」の「九山」も永嘉にある地名であり、『琵琶記』の作者と目される高明も永嘉の人とされるように、南戲發祥の地とされる戯曲文學の一大中心地であった。

さて、『白兔記』第二出の次の曲辭を見てみよう。

**【疎影】** 彤雲布密。見四野、盡是瓊粧銀砌。迸玉篩珠。只見柳絮

梨花在那空中舞。長安酒價增高沽。見漁父披簑歸去。鼻中、只聞的梅花香、要見竝無覓處。

【換頭】看颯。青山頓老、見過往行人、迷踪失路。下幕垂簾、酌酒羊羔歌白紵。紅爐添炭人完聚。怎知道怎知道街頭上貧苦。

【疎影】黑々とした雲が濃く垂れ込め。周りを見回すと、一面白銀の雪化粧。玉をほとばしらせ珠をふるいにかけているかのよう。雪が降っている。まるで柳絮や梨の花が宙に舞っているようだ。長安の酒價はさらに値段を増して賣られている。見れば漁師が簑を羽織って歸っていく。鼻では、梅の香りを感じるのに、探し求めてみても梅の花は見つからない。

【換頭】見れば。青山はにわかにな年をとって眞っ白になり、行き來する旅人も、路を見失うほど。金持ちは家の中で幕を下ろしカーテンを閉じて、酒は羊羔酒を酌み交わし歌は白紵歌を歌っている。赤く燃えるストーブに炭を足して人々は團欒している。街頭には貧苦の人がいることをどうして彼らが知っていようか。

降りしきる雪の中、主人公劉知遠が自らの不遇をかこつ場面である。この【疎影】【換頭】二曲は、無名氏【女冠子】と柳永【望遠行】の二詞を襲っていると考えられる。その二詞の本文を『全宋詞』に據って擧げておこう。まず、無名氏【女冠子】。

同雲密布。撒梨花、柳絮飛舞。樓臺詭似玉。向紅爐暖閣、院宇深庭、廣排筵會。聽笙歌猶未徹、漸覺輕寒、透簾穿戶。亂飄僧舍、密灑歌樓、酒帘如故。○想樵人、山徑迷蹤路。料漁人、收綸罷釣歸南浦。路無伴侶。見孤村寂寞、招颺酒旗斜處。南軒孤鴈過、嘸嘸聲聲、又無書度。見臘梅、枝上嫩蕊、兩兩三三微吐。次、柳永【望遠行】。

長空降瑞、寒風剪、淅淅瑤華初下。亂飄僧舍、密灑歌樓、迤邐漸迷鴛瓦。好是漁人、披得一蓑歸去、江上晚來堪畫。滿長安、高却旗亭酒價。○幽雅。乘興最宜訪戴、泛小棹、越溪瀟灑。皓鶴奪鮮、白鷗失素、千里廣鋪寒野。須信幽蘭歌斷、彤雲收盡、別有瑤臺瓊樹。放一輪明月、交光清夜。

「同雲密布」「撒梨花柳絮飛舞」「想樵人山徑迷蹤路」「向紅爐暖閣」(以上無名氏詞)「好是漁人披得一蓑歸去」「滿長安高却旗亭酒價」(以上柳永詞)といった語が、それぞれ微妙にかたちを変えてではあるが、『白兔記』二曲の曲辭中にモザイク状にちりばめられていることは明らかであろう。

では、なぜこの二首が用いられたのだろうか。それを考える時に注目されるのが、『草堂詩餘』である。なぜなら、右に擧げた無名氏と柳永の二首は、『草堂詩餘』に収録されるからである。しかも、『草堂詩餘』はこの二首をただ収録するだけではない。「冬」の類目の中に、「冬景」「冬雪」の標題を附して、しかも無名氏詞、柳永詞という順序で連続して配列しているのである。前述のように南戲『白兔記』の原作は元代には成立していたと考えられるのだが、それと同時に元の元刊本『草堂詩餘』も、すでにそのように収録している。

さらに、ここでは次の点にも注意したい。右に無名氏の詞として引用した【女冠子】については、明末毛晉の汲古閣本『片玉詞』【補遺】に収録されるように、従来周邦彦の作品とされることが多いのだが、この詞は宋代の刊本とされる陳元龍註『詳註周美成詞片玉集』<sup>⑧</sup>には見えない。『全宋詞』は、無名氏の作として収録し、その註記において、先の丁仙現【絳都春】同様、やはり『草堂詩餘』から収録する旨を記す。現存する資料のなかで最も早くこの【女冠子】を録するのは、お

そらく元刊本『草堂詩餘』なのである。

ところで、『白兔記』の右の場面では、劉知遠が情景に事寄せつつ自らの不遇を述べるだけであり、物語そのものはまだほとんど動きだしてはいない。他の戯曲作品においても、このような「不遇」を描く場面の多くに、類似したモチーフや表現が共通して見出せる。その意味で、非常に「類型化」されたシーンであると言える。そして類型化されているがために、そのイメージは非常にクリアであるが、他方それが『白兔記』に「固有」のものとなっているとはいえない。このような、物語があまり動かない場面に於いて詠物的な曲辭が必要な場合、「書會の才人」たちは『水滸傳』の作者がそうしたように、恐らく『草堂詩餘』を参考にして、その場に必要な曲辭を構成した。前節で見た『水滸傳』の場合は詞を一首丸ごと引用するだけだが、『白兔記』の作者は『草堂詩餘』の類目を参考にして、隣接して配置される複数の詞をつぎはぎする形で、新しい曲辭を作り上げたのである。

なお、付言するならば、『白兔記』にも『水滸傳』と同様、既製の詞を丸ごと引用する例が見られる。それは、第一出「副末開場」の途中に置かれる次の詞である。

【滿庭芳】 山抹微雲。天連衰草、畫角聲斷樵門。站聽□□、□□  
 □離樽。多少蓬萊舊事、空回首煙靄紛紛。夕陽外、寒鴉數點、流水遶孤村。○銷魂。當此際、香囊暗結、羅帶輕分。慢贏得、秦樓薄倖名存。此去何時見也、襟袖上空染啼痕。傷情處、高城望斷、燈火已黃昏。

これは、言うまでもなく秦觀の詞である。吳曾『能改齋漫錄』卷十六「黃魯直詞謂之著腔詩」の條が「斜陽外、寒鴉萬點、流水遶孤村」の

如きは、字を識らざる人と雖も亦た是れ天生の好言語たるを知る」というように、秦觀の詞の中でもかなり人口に膾炙した作品だったと思われる。『草堂詩餘』では「晚景」の類目に収録されている。

もちろん、この詞は秦觀の別集をはじめとして、『草堂詩餘』以外の他の詞選集にも収録されており、主だったものだけでも『淮海居士長短句』、『淮海集』、『淮海詞』、『唐宋諸賢絕妙詞選』、『花草粹編』、『詞綜』などがあるが、しかしテキスト間でかなり大きな文字の異同が見られる。

まず第二句目「天連衰草」、これを『淮海詞』及び『詞綜』は「天粘衰草」に作り、『淮海詞』はその附註に明・楊慎の語を引用して「天粘」の方が表現として優れると言う。宋本とされる『淮海居士長短句』が「天連」に作っており、そのことからすると作者秦觀が本来「天粘」「天連」のどちらで作ったのかは確定しがたい。しかし、少なくとも「天連」が「天粘」に比較して平凡な表現であることは否めまい。『草堂詩餘』は「天連」に作り、『唐宋諸賢絕妙詞選』及び『花草粹編』も同様に作る。

その他の主な異同は以下の通りである。

聊共飲離樽↓聊共引離樽（長短句・淮海集・淮海詞・花草・詞綜）  
 秦樓薄倖名↓青樓薄倖名（長短句・淮海集・淮海詞・花草・詞綜）  
 空染啼痕↓空惹啼痕（長短句・淮海集・花草）

二つ目に挙げた「秦樓薄倖」は、杜牧の「十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名」を踏まえた句であることからすると、秦觀の原作はやはり「青樓」であったと考えるべきであろう。

では、『白兔記』の制作過程に於いて参照された本があったとすれば、それは何であったのだろうか。『唐宋諸賢絕妙詞選』と『草堂詩

餘」とは、文字が完全に一致しており、その意味では『白兔記』がどちらを参照していたかを特定することは困難かもしれない。しかし、少なくとも前掲の無名氏【女冠子】および柳永【望遠行】が、前者には収録されていないことからすれば、それはやはり『草堂詩餘』であったと考えるのが妥当ではないだろうか。

#### 四、『草堂詩餘』と宋元の小説集

戯曲以外では「書會の作」とされるものに、宋元の小説集（所謂「話本」）がある。次に、それら「話本」と『草堂詩餘』の関わりを考えてみよう。

まず、『清平山堂話本』所收「戒指兒記」を例としてみよう。この作品でも、物語自體がまだあまり動きはじめない部分において、ヒロインの容姿の説明と元宵の風景を詠うために、康與之【瑞鶴仙】と蘇軾【滿庭芳】の二首が引用されている。そして、この二首も、恐らく『草堂詩餘』から選ばれてきたと推測されるのである。挿入される順番は前後するが、まず上元の華やかで煌びやかな街の様子を詠じた詞からみてみよう。

【瑞鶴仙】瑞煙浮禁苑。正絳闕春回、新正方半。冰輪桂華滿。溢花衢歌市、芙蓉開遍。龍樓兩觀。見銀燭、星毬燦爛。捲珠簾、盡日笙歌、盛集寶釵金釧。○堪羨。綺羅叢裏、蘭麝香中、正宜游翫。風柔夜暖。花影亂、笑聲喧。鬧娥兒滿地、成團打塊、簇着冠兒鬪轉。喜皇都、舊日風光、太平再見。

この詞は、『草堂詩餘』だけでなく『花庵詞選』も収録している。また、『花庵詞選』がすでに「上元應制」との小題を附していることから、上元の景物を詠んだ詞として當時相當有名だったと思われるが、

先に述べたように「戒指兒記」の作者は恐らく、『草堂詩餘』を参照してこの詞を引用している。なぜなら、もう一首の蘇軾【滿庭芳】が、同時代の詞選集では『草堂詩餘』のみが収録するものだからである。

那女孩兒生於貴室、長在深閨、青春二八、有沉魚落雁之容、

閉月羞花之貌。況描繡針綫精通、琴棋書畫、無所不曉。怎見得、

有隻詞名【滿庭芳】、單道着女人嬌態。其詞曰、

香鬢雕盤、寒生水筋、畫堂別是風光。主人情重、開宴出紅粧。膩

玉圓搓素頸、藕絲嫩新織仙裳。雙歌罷、虛欄轉月、餘韻尚悠揚。

○人間何處有、司空見慣、應謂尋常。坐中有狂客、惱亂愁腸。報

道金釵墜也、十指露、春筍長。親曾見、全勝宋玉、想像賦高堂。

その娘は身分の高い生まれ、屋敷の奥深くで成長し、今ちよ

うど年頃の十六歳、魚を沈め雁を落とし、月を隠れさせ花も羞

じらわせんばかりの素晴らしい美貌の持ち主です。しかもお裁

縫の腕もよく、琴棋書畫、なんでもござれといった才媛ぶり。

その姿はいかにというと、ここに一首の【滿庭芳】、女性のあ

で姿を詠ったものがございます。その詞に言うには、

香が立ちこめ、水のように透明な調度品からは涼氣が立ち上り、

廣間はまるで別世界のように。氣の利く主人の計らいで、宴會が始

まると美女が登場。玉の如く滑らかで白い首筋、身につけるは眞っ

白で柔らかな真新しい衣裳。その歌聲がやみ、高い軒端に月が掛

かるころになっても、その餘韻はまだ漂っている。○こんな素晴

らしい女性は他にはない、主人にとっては見慣れたものかもしれない

が。客たる我が身にとっては、たまらなく惱ましい。「金の

簪が落ちましたよ」と知らせると、伸ばされた指は、まるで春の

タケノコのように。今眼前の女性は、かの宋玉が、想像の中で赴い

た高堂の神女にはるかに勝る。

蘇軾のこの詞も、康與之の【瑞鶴仙】同様、廣く人々に知られた作品であったと考えられる。そのことは、この詞が「戒指兒記」以外にも、元曲や小説にしばしば丸ごと引かれたり、分解されてその一部が曲辭やせりふとして用いられたりしていることから明らかである。もつとも、「戒指兒記」にみえる引用はかなり杜撰である。四字句であるべき後段八句目が一字脱落して「春筍長」と三字句になってしまっているのをはじめ、現存の通行本が「歌聲」「虚櫓」「高唐」に作る前段八・九句目及び後段末句が、それぞれ「雙歌」「虚欄」「高堂」となっている。前二者はともかく、「高堂」はこの詞が末玉「高唐賦」を踏まえていることを考えると、あきらかに誤りである。だが、ここではそういったことよりも、なぜこの詞がここに引かれているのかということについて考えてみたい。

【滿庭芳】引用の直前の文で、詞の内容を説明して「女人嬌態」というが、これは「女性のあで姿」とでもいった意味の語である。しかし、この蘇軾詞は、單に「美人」を詠ったものではなく、何か具體的に諷諭するものがあつたと解釋されることもあつた。たとえば、この詞は元曲の中で以下のような文脈の中で使われている。

(東坡云)……一日請俺赴宴、出歌者數人。見一女子、擊杯良久、不見其手。俺伴言道「小娘子金釵墜也」。那女子出其手捫其髻、衆官皆發大笑。安石令俺爲賦一詞。小官走筆賦【滿庭芳】一闋。誰想那女子就是安石的夫人。到次日安石將小官的【滿庭芳】奏與天子、道俺不合吟詩嘲戲大臣之妻。以此貶小官到黃州團練。就着俺去看菊花。……(正末云)願聞【滿庭芳】妙詞。……(詞云)香鬢雕盤、寒生水筋、畫堂別是風光。主人情重、開宴出紅妝。賦

玉圓搓素頸、藕絲嫩新織仙裳。雙歌罷、虚雲轉月、餘韻尙悠揚。  
○人間何處有、司空見慣、應謂尋常。坐中有狂客、惱亂柔腸。報道金釵墜也、十指露、春筍纖長。親曾見、全勝末玉、想像賦高唐。  
(正末云)高才、高才。

(東坡のセリフ)……ある日私を宴會に招待して下さり、歌妓も數人出ておりました、そのなかにずっと盃を掲げていて、その手が見えない女がいました。わたしが戯れに「お嬢さん、金の釵が落ちましたよ」といいますと、その女はその手を出して鬢に手をやり、その場の人々はみんな大笑いしました。安石は私に詞を一首作るよう命じられたので、私は筆を走らせ【滿庭芳】を書いたのです。いったい誰がその女こそ安石の奥方であると思ったことでしょうか。次の日、安石は私の【滿庭芳】を皇帝陛下に奏上し、私が不屈きにも大臣の妻をからかったと言い、この罪をもって私を黃州團練の職に左遷し、私に菊の花を見に来させたのです。……(正末のセリフ)その素晴らしい【滿庭芳】を聴かせてくれませんか。……(詞に云わく)……(譯は上文參照)……(正末のセリフ)見事、見事。

ここに引用したのは、吳昌齡『花間四友東坡夢』第一折、蘇軾が自分の左遷の理由を語る場面である。元曲ではもう一つ、無名氏『蘇子瞻醉寫赤壁賦』でもやはりこの詞が丸ごと引かれるが、その文脈はほぼ同じである。いずれの劇に於いても、蘇軾は主人公として登場し、彼が王安石主催の宴會で目にした美しい女性を題材にこの【滿庭芳】を詠んだところ、實はその女性が王安石の妻妾であつたがために訴えられ、蘇軾は黃州に左遷されてしまう。

しかし、この詞の解釋においてより重要な意味を持つのは、王安石



がこの詞に對して發した次の言葉であろう。

不合吟詩嘲戲大臣之妻（不屈きにも大臣の妻をからかった）。

『花間四友東坡夢』第一折）

「臣耐此人無禮。某請你家宴、小官侍妾、淫詞戲却、更待干罷（どうしてこやつが無禮を許せよう。お前を家宴に招いてやったのに、私の妾を淫らな詞を創ってからかった、どうしてくれよう）。

（『蘇子瞻醉寫赤壁賦』第一折）

つまり、この詞は自分の妻を「嘲戲」した「淫」なものだ、と王安石ははっきり述べるのである。そして、『草堂詩餘』もおそらく元曲と類似した世界をこの詞に見ているのではないだろうか。

『草堂詩餘』は、この蘇軾【滿庭芳】を「佳人」という類目に分類しているが、この作品を單なる「佳人」を詠じたものと解釋していたわけではあるまい。そのことは、この作品に附された詞話から推測される。

『玉林詞選』二云「柳耆卿有【晝夜樂】詞云『秀香家住桃花徑。

箏神仙、才堪竝。層波細剪明眸、膩玉圓搓素頸。愛把歌喉當延遲。洞天邊、亂雲愁凝。言語似嬌鶯、一聲聲堪聽。○洞房飲散簾幃靜。擁香衾、歡心稱。金爐射鼻青煙、鳳帳燭搖紅影。無限狂心乘酒興。這歡悞、漸入佳境。猶自怨鄰雞、道秋宵不永』蓋爲贈妓作也。此詞麗以淫、不當入選、以東坡嘗引用其語、故併此詞錄之」

『玉林詞選』に云う「柳耆卿に【晝夜樂】詞が有り、その詞に『秀香の家は桃花徑に在り。（その美貌は）神女であって、ようやく釣り合うほど。潤んだ流し目をする大きな瞳、玉のように滑らかな白い首筋。自慢の喉を宴席で披露すれば、天の果てまで響きわたり、雲さえも憂え動かなくなるほど。鶯の囀りのようなその

『草堂詩餘』と書會

お喋りまで、一聲一聲が素晴らしい。○宴會は終わって寢室のカーテンの中にはひっそり二人だけ。いい匂いのする蒲團を抱いて、ああ嬉しい。金の香爐からは青い煙がゆらゆらと、鳳の刺繍のカーテンには蠟燭の影が揺れる。酒に酔ったせいにして思う存分愉しもう。それなのにこの愉しみが、やっと好いところっていうときに。隣のニワトリは憎たらしいたらありゃしない、秋の夜は永くないですよ、なんて言うんだから」とある。恐らく妓女に贈った詞であろう。この詞は豔麗でしかも淫らであり、選集に入れるべきではないが、東坡がその詞語を用いているので、この詞も収録することにした」。

【滿庭芳】の詞話として引用される『玉林詞選』、これは黄昇『唐宋諸賢絕妙詞選』のことである。ここには、柳永【晝夜樂】詞の全文と、黄昇がこの柳永詞に附した按語が引かれている。按語の中で黄昇は柳永詞について、「妓女に贈った淫詞だが、蘇軾がその詞語を用いているので敢えて収録した」と述べる。彼の言う「蘇軾がその詞語を用いた」詞というのが、右に挙げた【滿庭芳】であることは言うまでもない。

そうだとすると、「戒指兒記」のように、物語の展開上「諷諭」的な意圖を必要とせず、ただヒロインの類い希なる美しさを詠物的に詠んだ「佳人」詞を必要としたと考えられる場合に於いては、この「淫」と認識されるような【滿庭芳】ではなく、他の「佳人」詞を使うべきだったのではないだろうか。佳人を詠じた詞は、それこそ無数にある。『草堂詩餘』の「佳人」の分類にも、【滿庭芳】の他に柳永の【玉女搖仙佩】をはじめとした複数の作品が挙げられているし、「佳人」の後、さらに「妓女」「宮詞」「閨怨」といった類目が続くのだが、それらに

描かれる女性も、一般には全て「美女」とイメージされる。

では、「戒指兒記」の作者はなぜ他ならぬ蘇軾【滿庭芳】詞を選んだのだろうか。それは、この詞が『草堂詩餘』の女性を詠じた一群の類目の冒頭にあたる「佳人」、すなわち美女の中でも特別な美女を表す語を冠した類目の、しかも第一番目の詞として収録されていたからではないだろうか。

つまり、「戒指兒記」の作者は、内容をあまり吟味することなく、『草堂詩餘』の類目を参考にし、まず「佳人」の部分から蘇軾【滿庭芳】を選び出し、それからまたページを繰って「元宵」の部分から康與之【瑞鶴仙】を選び出した、というわけである。

このほか、明末の三言一拍到まで視野を擴大すれば、類似した例は更に多くなる。たとえば、馮夢龍編『喻世明言』卷二四「楊思温燕山逢故人」冒頭では、元宵の景色を描寫するために「胡浩然先生所作」として次の詞が引用される。<sup>32)</sup>

【傳言玉女】一夜東風、不見柳梢殘雪。御樓煙燧、對鰲山綵結。簫鼓向晚、鳳輦初回宮闕。千門燈火、九衢風月。○繡閣人人、乍嬉遊困又歇。艷粧初試、把珠簾半揭。嬌羞向人、手撚玉梅低說。相逢長是、上元時節。

この【傳言玉女】は、『樂府雅詞』及び『花庵詞選』がそれぞれ晁冲之の作品として収録し、『全宋詞』もまた同様に晁冲之を作者とするものである。ところが、『喻世明言』は「胡浩然先生所作」と明言しており、それはやはり『草堂詩餘』に由来すると考えざるを得ない。なぜなら、この詞の作者を胡浩然として収録するのは、『草堂詩餘』だけであるのみならず、『喻世明言』と他本との間に見える本文の文字の異同が、『草堂詩餘』とであれば合致するからである。<sup>33)</sup>

さらに、これはある程度物語の實質的な展開にも絡む場面での引用だが、凌濛初編『二刻拍案驚奇』卷三「權學士權認遠鄉姑、白孺人白嫁親生女」には、次の詞が引用される。

是時正是七月七日、……乃咏宋人汪彦章「秋閨」詞、改其末句一字云、

高柳蟬嘶。採菱歌斷秋風起。晚雲如髻。湖上山橫翠。○簾卷西樓、

過雨涼生袂。天如水。畫樓十二。少箇人同倚。(詞寄【點絳脣】) 地の文で「改其末句一字」というように、「少箇人」は本來は「有箇人」に作る。この「宋人汪彦章」作「秋閨」詞は、詞選集ではやはり『草堂詩餘』だけが、類目「秋閨」の第四首目として収録するのみである。汪彦章(汪藻)の別集もこの詞を収めるが、もちろんそこに「秋閨」の小題は附されていない。

## 五、結語

以上のように、「書會の才人」は『草堂詩餘』を時に「類書」として利用し、そこから様々な詞や詞句を拾い出して、彼らの創作に役立てていたと思われる。『草堂詩餘』は、その「分類」という體例、作品の網羅性、附された注や詞話といった外見が、すでに極めて「類書」である。また、筆者は未見だが、國立中央圖書館現藏の至正十一年雙壁陳氏刊本『草堂詩餘』には、編者として「建安古梅何士信君實」という人物の名が刻されているという。彼は恐らく、『類編群英選前後集』、『諸儒標題註疏小學集成』、『類編古今事林群書一覽』といった類書の編者とされる「建安古梅何士信」と同一人物であろう。<sup>34)</sup> だとすれば、そもそもその編者自身も「類書」と深く結びついていることになる。

それにしても、「書會」での受容ということ考えた場合、『草堂詩餘』の「類書」性を最も端的に體現する「分類」という體例が、何を模範として發想されているかは、重要な問題として更に検討する必要があるだろう。従來の研究にあっては、『草堂詩餘』の分類の範は「類書類」「歲時記類」が想定されてきた。<sup>(2)</sup>しかし、『草堂詩餘』の分類を、たとえば『藝文類聚』や『初學記』、『白氏六帖』などと比較してみた場合、そこにはかなりの差異があるといえる。『藝文類聚』など上述三種の類書の分類及び配列は、基本的に同じである。すなわち、『天文』に始まり「四季」「節序」「地理」「人物(帝王・聖賢・忠孝等)」「禮」「樂」「職官」「居處」「服飾器物」、最後に「動植物」がくる。對して『草堂詩餘』は、「四季」がその頭に置かれ、「節序」「天文」「地理」「人物(隱逸・漁父・佳人等)」「人事」「器物」「動植物」である。こうした差異は、おそらく詞の題材となりうる對象が片寄っていたことが主な原因であろう。また『草堂詩餘』所收詞全體の約三分の一が「春」の詞によって占められているように、類目によって極端な偏重が見られる。この點、類書がどちらかといえば極端な偏重を避けようとする傾向にあるのは自ずと異なる。詞が愛好した主題にしたがって、從來あつた「分類」が一部修正されたと考えられることも出来るだろう。

ただし、たとえば「人事」という大類目を見た場合、從來あつた「分類」に一部修正を加えるという作業が行われたとして、その作業が元來何をめざして、どこで行われたかについて、一定の示唆を得ることが出来る。

「人事」という大類目には「附宮詞・閨情・風情・旅況・離別」という小類目が更に加えられる。<sup>(3)</sup>その内容を見てみると、全體として

「戀愛」を主題としたものへの偏重が窺えるのである。小類目のうち、皇帝に顧みられない宮女の悲しみを詠った「宮詞」や、男の不在に對する女の嘆きを詠った「閨情」が、戀愛への偏重を示すのは半ば當然である。ところが、「風情」は元來單に戀心の意であり、その主體は男女を問わないのだが、『草堂詩餘』が収めるのは男の眷戀の情を詠つたものに偏る。さらに、「旅況」とは旅の景色や望郷の念など、その内容は多岐にわたるはずだが、やはり遠くにいる戀人の存在を思わせる内容が詠われる。また「離別」にしても、友人同士や兄弟・親との別れなど、様々な「離別」が想定しうるにも関わらず、收められているのはやはり「戀人たちの別れ」なのである。

なお、これら類目の中間に當たる「風情」に配された詞の中には、かの有名な『會眞記』に基づく「開朱戸、應自待月西廂」という句が見える。『會眞記』の物語は金・元代以降『西廂記』として廣く受容され、以後所謂「才子佳人」劇の一種の典型となつた作品である。たとえば元・高明『琵琶記』もその流れの上にあると言えるだろう。『琵琶記』を例に、それら「才子佳人」劇に共通する物語展開を見てみると、幸せな男女がいて、男が科擧に赴くために別れ(第四出「蔡公逼伯喈赴試」、第五出「伯喈夫婦分別」、離れ離れになつた後もお互いを想い合う(第八出「趙五娘憶夫」、第二十一出「伯喈彈琴訴怨」等)という場面が、ほとんど例外なく設定されている。そこにみえる主題が、『草堂詩餘』「人事」から窺われる嗜好と共通することは明らかであろう。このことは、『草堂詩餘』「人事」に收められた詞がそれら小説や戯曲にただちに轉用できることを意味するだけではない。『西廂記』や『琵琶記』と同じ「才子佳人劇」的枠組みが、「自待月西廂」を中心に、「人事」という類目全體から浮かび上がっていると

えるのではないだろうか。

もっとも、『草堂詩餘』にこのような分類が可能となったのは、それまでの實作の蓄積があったからである。そしてこういった「才子佳人劇」の確立には、作品の蓄積と分類、その両方が不可欠であったであろうことは、想像に難くない。

『草堂詩餘』の「分類」の模範については、更なる考察が必要であるが、いずれにせよ、『草堂詩餘』が詞のアンソロジーとしては例外的な「分類」という體例を採ること、その「分類」の一部には「書會」の作品群と類似した構成がみえるということは、『草堂詩餘』が「書會」に於いて「類書」として用いられただけではなく、「書會」と極めて隣接した場所それが編纂された可能性をも示唆しているのではないだろうか。もちろん、今日の資料状況ではそれを十分に證明することもできない。しかし、『草堂詩餘』の研究は、當時の通俗文學及び「書會」の實態を考察する上でも、非常に重要な意義を有することになるであろう。

#### 注

- (1) 例えば、明・俞彦『爰園詞話』に「周長卿元曰『選草堂詞、亦如昭明文選。但入選面目都相似、不入者非無佳詞、便覺有侷氣』此語良然」、清・陸燾『問花樓詞話』に「草堂本、不著編者姓氏、大抵宋慶元以前人輯耳」等とある。なお、以後の詞話類の引用は特に断わらない限り全て唐圭璋『詞話叢編』（中華書局、一九八六年）に依る。
- (2) 『草堂詩餘』の刊本については、中田勇次郎『讀詞叢考』Ⅱ「詞集」三「草堂詩餘の版本」（創文社、東洋學叢書、一九九八年）及び劉軍政「明代『草堂詩餘』批評論」（河南大學研究生碩士學位論文（未刊行）、

二〇〇三年）、李菁「『草堂詩餘』版本流傳研究」（湖北大學碩士學位論文（未刊行）、二〇〇三年）に詳しい。それらによると、『草堂詩餘』には少なくとも四十種類近くの刊本が存在する。『樂府雅詞』及び『花庵詞選』などの刊本については饒宗頤『詞集考』（中華書局、一九九二年）を参照したが、それらの現存刊本は最多でも十種類に満たない。また、明代には前代までに編まれた種々の詞選集を受けて『花草粹編』が編まれており、それも廣汎な讀者層を持っていた可能性がある。しかし、そのうち『草堂詩餘』と重なる作品については、編者陳耀文が序文で「是刻也、由花間草堂而起、故以花草命編」というように、直接『草堂詩餘』から採録されたものである。

(3) 現存する文献中で『草堂詩餘』に言及する最も早い例は、宋・王楙『野客叢書』巻四である。『野客叢書』はその序文から寧宗期の成立と推定され、少なくともその頃には註の施された『草堂詩餘』が行われていたことが知られる。また、理宗期の陳振孫の書目『直齋書錄解題』に、『草堂詩餘』二巻及びそれに類似する選集があったことが記されている。なお、この『野客叢書』に引かれる「張仲宗『滿江紅』詞」は、實は周邦彦の作である。しかもこの詞は、元刊本など早い時期の刊本には見えないが、却って明・顧從敬編『類編草堂詩餘』には正しく周邦彦の名を以て収録されている。

(4) 王國維『庚辛之間讀書記』（『王觀堂先生全集』冊四所收）、趙萬里『校輯宋金元人詞』引用書目（國立中央研究院歷史語言研究所、一九三一年）参照。

(5) 中田氏の調査によると、分類本の主な刊本としては、元至正十一年雙壁陳氏刊本（國立中央圖書館所藏。筆者未見。中田氏も趙萬里氏の『校輯宋金元人詞』引用書目）を参照したという、明洪武二十五年遼正書堂刊本（『續修四庫全書』所收）、明嘉靖中安肅荆聚刊本（『四部叢刊』所收）の三種がある。これら以外にも刊本は多數存在するが、い

れも後代のものであり、また増補改訂によって収録詞数は變動する。また、至正十一年刊本より古いものとして、京都大學所藏（狩野直喜博士舊藏本）至正三年刊本があるが、前集に缺葉があり、また後集は別の刊本の合刻と考えられるなど、様々な問題が存在する。なお、以下本稿における『草堂詩餘』の引用は明洪武二十五年刊本に據る。

(6) 筆者は以前、収録作品が雅俗や有名無名問わず極めて雑多であること、また詞に附された註と詞話が多く他の選集や類書などからの抜き書きと考えられることから、『草堂詩餘』が詞をめぐる様々な情報をできるだけ網羅的に集めようとした「類書」の書物であることを論じた。詳しくは拙稿『『草堂詩餘』の類書の性格について』（『宋詞研究會編』『風絮』第三號、二〇〇七年）を参照されたい。

(7) 増田涉氏によれば、元來「話本」という語は話藝を指す言葉であって、小説集の意ではないらしい。詳しくは、増田涉『「話本」ということについて』（大阪市立大學『人文研究』第十六卷第五號、一九六五年）を参照。ここでは、便宜上『醉翁談錄』『綠窓新話』『清平山堂話本』等の小説集を總稱して「話本」と呼ぶことにする。

(8) 以下、『水滸傳』の本文は、校訂を含め、全て凌廣等校點『容與堂本水滸傳』（上海古籍出版社、一九八八年）に據る。

(9) 『水滸傳』の引用の譯については、『完譯水滸傳』（吉川幸次郎・清水茂譯、岩波文庫）等を参照されたい。

(10) 『東京夢華錄』卷二、『邵氏聞見錄』卷三、『夢梁錄』卷二十などを参照。その詞は『絳都春』一首を存するのみである。

(11) 但し、『草堂詩餘』が作る文字と『水滸傳』のそれとの間には若干の異同がみられる。「初報」又「報」、「皇都」皇州、「晚色」曉色、「絳霄樓」納樓臺、「開嬉笑」聞嬉笑、「一點」須臾一點。

(12) 『草堂詩餘』が當時の説唱藝人や話本作者たちの参考書であった、という見解そのものは、吳世昌氏が『草堂詩餘』跋―兼論宋人詞集與話

本之關係』（『羅音室學術論著』、中國文聯出版社、一九八四年）の中で既に提出している。

(13) 錢南揚氏は『戲文概論』（上海古籍出版社、一九八一年）や『永樂大典戲文三種校注』（中華書局、一九七九年）で「書會是編寫劇本的團體組織」と述べ、謝桃坊「宋代書會先生與早期市民文學」（『社會科學戰線』一九九二年第三期）もほぼ同様の見解を示す。また、吉川幸次郎『元雜劇研究』「元雜劇の作者」（『東方學報京都』第十三冊三分・第四分、一九四三年、後に『吉川幸次郎全集』第十四卷）や、小川環樹『水滸傳』の作者について（『日本中國學會報』第三集、一九五一年、後に『小川環樹著作集』第四卷）の中に見える「書會」註にも詳しい。

(14) 第四十六回にも「後來薊州城裏書會們備知了這件事（後に薊州城内の書會の人々がこのことを聞き知ったので）」という記述が見える。これもやはり、『水滸傳』の成立過程に於いて、「書會」が關與していたことを窺わせる。

(15) 成化本『白兔記』については、大阪大學中國文學研究室編『成化本『白兔記』の研究』（汲古書院、二〇〇六年）を参照。

(16) 成化本のテキストには誤字や脱字が多く、そのままでは意味が通じない場合がある。以下、本稿における成化本の引用は、本文・譯文ともに全て註（14）所掲書に據り、文字は校訂後のものだけを表示する。なお、「□」は原缺字。

(17) なお、この二首に見える表現やモチーフは、他の戯曲作品でも「冬」「雪」の景色をいう際にしばしば用いられる、いわば常套表現でもある。例えば、關漢卿『裴度還帶』第二折、正末裴度が雪の中で歌う曲辭には、「南呂・一枝花」恰便似梅花遍地開、柳絮因風起。有山皆瘦嶺、無處不花飛。凜冽風吹。風纏雪銀鵝戲。雪纏風玉馬垂。探樵人荷擔空回。更和那釣魚叟披蓑捲起。【隔尾】這其間正亂飄僧舍茶煙濕。密灑歌樓酒力微。青山也白頭老了塵世。都不到一時半刻、可又早周圍四壁。添我在冰壺畫

圖裏」とある。しかし、その情況に鑑みたとでもなお、『白兔記』の曲辭は『草堂詩餘』が並べて載せる二首のそれと酷似しており、何らかの影響關係を示唆しているように思われる。

(18) 『續修四庫全書』所收。

(19) 『草堂詩餘』の刊本の中でも、明・嘉靖年間の陳鍾秀本(『四印齋所刻詞』所收)や分調本系統の諸本では周美成を作者として記すのだが、それは「はじめに」の部分で王國維・趙萬里の見解として引用したように、「分調本(筆者註：より正確には「後代」分類本の一部も」と言うべきであろう)は分類本がその前の詞に記す撰者をそのまま當てて撰者としている」からに過ぎないだろう。事實、『女冠子』直前の『滿路花』【少年遊】『紅林擒近』がそれぞれ作者を「周美成」「前人」「前人」としている。なお、清・萬樹『詞律』は、同じ詞を柳永の作として擧げており、それはすぐ後ろの『望遠行』が彼の作品であること何らかの因果關係を想定できるだろう。

(20) 例えば、無名氏『殺狗勸夫』第二折冒頭、正末孫一が雪の中を乞食小屋に歸って行く場面の曲辭には、「正宮・端正好」黒黯黯凍雲垂。疏刺刺寒風起。遍長空六出花飛。不停閑雪兒緊風兒急。這場冷着我無存濟。

【滾繡毬】有那等富漢每。他道是壓瘴氣。下的是國家祥瑞。怎知俺窮漢每少食無衣。我則見滿天裏飛磨旗。半空裏下炮石。俺須是死無箇葬身之地。只落的抱雙肩緊把頭低。我如今冒他大雪窖中去、抵多少袖得春風馬蹄歸。凍的我脚步兒難移」とある。

(21) 『草堂詩餘』の収録する秦觀『滿庭芳』を引用しておく。「山抹微雲。天連衰草、畫角聲斷譙門。暫停征棹、聊共飲離樽。多少蓬萊舊事、空回首煙靄紛紛。斜陽外、寒鴉數點、流水遶孤村。○銷魂。當此際、香囊暗解、羅帶輕分。謾贏得、秦樓薄倖名存。此去何時見也、襟袖上空染啼痕。傷情處、高城望斷、燈火已黃昏。

(22) それぞれ参照したテキストを列挙しておく。龍榆生點校『淮海居士長

短句』(宋本に依據。中華書局、一九五七年)。明・嘉靖刊本『淮海集』「長短句」(『四部叢刊』初編所收)。汲古閣刊『宋名家詞六十一種本』『淮海詞』(『續修四庫全書』所收)。明刻本・黃昇編『唐宋諸賢絕妙詞選』(『四部叢刊』初編所收)。明・陳耀文編『花草粹編』(『四庫全書』所收)。清・朱彝尊編『詞綜』(康熙三十年裝梓樓刊本)。

(23) 明・楊慎『詞品』卷三「天粘衰草」の條に、「秦少游『滿庭芳』「山抹微雲、天粘衰草」、今本改粘作連、非也。韓文「洞庭汗漫、粘天無壁」。張粘詩「草色粘天鷓鴣恨」。山谷詩「遠水粘天吞釣舟」……粘字極工、且有出處。又見『避暑錄話』可證。若作連天、是小兒之語也」とある。

(24) 「話本」の創作に書會が關與していたことについては、胡士瑩『話本小說概論』(中華書局、一九八〇年)等に言及がある。なお、註(7)で擧げた「話本」のうち、『綠窓新話』は、誤解を恐れずに言えば一種の「歌物語」的な體裁を採る「話本」であり、必ず登場人物が詩詞を詠む。そのため、他書から作品を借用する必要がない。また、『醉翁談錄』の中にも柳永や蘇軾を扱った物語が入っており、その中では詞が使われているが、これも『綠窓新話』の場合と同様に元來歌物語的な話があったそれを記述していると考えられるので、やはり他書を参照する必要はないのである。

(25) 同一の作品中に作者を同定しうる詞二首が引かれ、なおかつその二首がほとんど連續して挿入される例は珍しい。「戒指兒記」以外では、『一刻拍案驚奇』卷五「裏敏公元宵失子、十三郎五歲朝天」冒頭に、上元の夜を詠じた詞として、康與之『瑞鶴仙』、柳永『傾杯樂』、李邕『女冠子』の三首が並んで引用される。このうち、李邕の『女冠子』は『草堂詩餘』に見えるのが最も早く、『全宋詞』も『草堂詩餘』から収録する。しかも、三首はいずれも『草堂詩餘』後集卷上「上元」の項に、それぞれ第一首目・第三首目・第八首目として、この引用と全く同じ順序で収録されている。

(26) 例えば、關漢卿『單刀會』第三折【石榴花】には「安排筵宴不尋常。休想道畫堂別是風光。……玳筵前擺列着英雄將。休想肯開宴出紅妝」とあり、同『玉鏡臺』第一折には【六么序】「藕絲嫩新織仙裳」、「公篇」  
「宋玉襄王。想像高唐。止不過魂夢悠揚」の曲辭が見える。

(27) 現存する蘇軾詞の別集のうち、最も早いとされる元刊本を底本とした『全宋詞』の本文を次に引用しておく。なお、劉尚榮校證『傳幹注坡詞』(巴蜀書社、一九九三年)は、前段八句目を「歌聲」ではなく『草堂詩餘』と同じ「雙歌」につくる。「香鬢雕盤、寒生水飭、畫堂別是風光。主人情重、開宴出紅妝。膩玉圓搓素頸、藕絲嫩新織仙裳。歌聲罷、虛檐轉月、餘韻尙悠颺。○人閒何處有、司空見慣、應謂尋常。坐中有狂客、惱亂愁腸。報道金釵墜也、十指露、春筍纖長。親曾見、全勝宋玉、想像賦高唐」。

(28) 『赤壁賦』第一折該當箇所を以下に引用しておく。曲辭は煩瑣になるので省略した。(王三) 左右、將那繡簾捲起者。恁這十箇侍女中、教一箇與衆相公把一杯。(旦) 理會的。(把家酒科、正末唱)【元和令】【上馬嬌】【游四門】【勝葫蘆】【後庭花】【柳葉兒】(帶酒科、二) 介甫、酒够了也。(王三) 學士再飲幾杯。(秦三) 學士、何不作詞一首。(正末) 令人、將紙墨筆硯來。(王三) 下次小的每、將紙墨筆硯來、放在學士跟前。(正末寫科、二) 揣揣寫就了也。(王三) 學士試表白咱。(正末云) 詞寄【滿庭芳】。詞曰「香鬢雕盤、寒生水飭、畫堂別是風光。主人情重、開宴出紅妝。膩玉圓搓素頸、藕絲嫩新織仙裳。雙歌罷、虛檐轉月、餘韻尙悠揚。人閒何處有、司空見慣、應謂尋常。坐中有狂客、惱亂愁腸。報道金釵墜也、十指露春筍纖長。親曾見、全勝宋玉、想像賦高唐」……(王三) 蘇軾去了。回耐此人無禮。某請你家宴、小官侍妾、淫詞戲却、更待干罷。我到來日見了聖人說過。なお、『東坡夢』『赤壁賦』ともに、テキストは『全元戲曲』(人民文學出版社、一九九〇年)に據った。

(29) 黃昇『唐宋諸賢絕妙詞選』卷五(四部叢刊)初編所收本)参照。

(30) この物語は、元・沈和甫『鄭玉娥燕山逢故人』(已佚)という戯曲と題材を同じくしていると考えられている。また、胡士瑩氏は註(24)所掲書の中でこの物語が「寫定」された時期について、「大概是南宋後期」であるとす。現存するテキストは明代のものだが、その起源はかなり遡れることは確かであろう。

(31) 正確に言えば、『草堂詩餘』の元刊本や明洪武本といった代表的な分類本系統の刊本において、この【傳言玉女】の詞牌名の下には作者名が附されていない。しかし、その直前の【萬年歡】には胡浩然の名が作者として附されており、第三章で引用した【女冠子】と同様の作者同定が、以後の受容の中で行われたと考えられる。現に、分調本系統の汲古閣『詞苑英華』本では、胡浩然の名を【傳言玉女】の作者として記す。

(32) 『國立中央圖書館善本書目』参照。趙萬里『校輯宋金元人詞』引用書目によると、國立中央圖書館現蔵の至正十一年雙璧陳氏刊本には「建安古梅何士信君實編選」と刻されているという。なお、『北京圖書館古籍善本書目』は収録する『草堂詩餘』の諸刊本に彼の名を編者として冠しており、筆者はそれらを見したが、彼の名を實際に刻した刊本は見あたらなかった。恐らく至正十一年刊本の影響を受けて、書目編集の際に彼の名が冠されたのであろう。

(33) 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大學出版會、二〇〇六年)参照。宮氏の考察によれば、何士信は元の人。註(3)でも言及したように、『草堂詩餘』という名の註付き詞選集は南宋寧宗期には存在していたと推定される。ただし、現存元刊本が参照していることが明白な『花庵詞選』との成立の先後や、『野客叢書』が引く作品と註が元刊本には収録されないことなどからすれば、この南宋本『草堂詩餘』が元以後の『草堂詩餘』と同じであったとは考えにくい。何士信は、あくまでも元以後の編者とするべきであろう。

(34) 中田勇次郎前掲書参照。

(35) 他の大類目、例えば前集の春夏秋冬や後集の節序などでは、小類目はそれぞれの詞牌名の上に時々記されるだけで、大類目の標記の下にその中に含まれる小類目一覽が附されることはない。この部分だけが特別扱いなのである。